去年の暮れに、熊本で優勝祝賀会を開いてもらったんです。知事さんをはじめ六百人位集まってですね。とてもうれしかったです。済済醫の同窓会が中心になって開いてくれたんですが、済済醫の縦横のつながりはすごいですよ。その時母校にも行きまして、在校生に話したんです。「卒業してはじめてそういうのを知るし、済済醫は他校と違うんだ」と。ああいう面では自分の母校だからではなくすばらしい学校だと思いますね。

濃人さん

僕が高校二年の時に親父が亡くなったんです。僕は子供の頃からプロ野球の選手になって両親に楽させたいといつも思っていました。

だから済済醫を出る頃から野球をやる以上はプロでやってみたいという気持でいたんです。大学にも一年ほどいきましたけれども、親父がいないので、いろいろな面で困るということで大学も途中でやめまして、そしてノンプロの日鉄二瀬に入ったわけです。

そこで濃人さんといういい監督さんに恵まれましてね。プロにいきたいんだったらいつでもいかしてやるからということでね。そのかわり自分自身が、これだったらもうプロへいってもやれるというふうに自信をもてたら喜んで出してやるということなんです。

そこに二年間いました。プロにいくための練習とか、精神的なものも随分鍛えられたと思います。それでこれだったら大丈夫ということで濃人さんが「お前はもうプロにいってもいい。カープに行け」と決めてくれたわけです。

日鉄二瀬の場合は、プロ野球の選手になりたいと願う者ばかりが集まっていたわけなんですね。ですから少々の練習では皆んなへこたれなかったと思うんですよ。本当にきつい練習でしたよ。僕はプロに入ってからもあれだけ練習したことはありません。今、うちのファームがやってますけれども、あれを時間的にも長く、いろいろ細かく練習したということです。

南海時代

広島カープには昭和三十三年に入団して十二年間いました。そして現役としてはあと二、三年だなと考えていた時に、南海にいかないかということになったんです。この時は随分考えましたけれども、南海での四年間、選手が二年、コーチが二年でしたけれども、今の自分の野球に非常にプラスになったと思います。セントラルだけではなくパシフィックのいろいろな野球を知ることができましたからね。そういう点では非常によかったと思っています。

郷土の大先輩

プロ野球界には郷土の大先輩でもあり、野球の大先輩でもある川上さんがおられるわけですね。川上さんのあの偉大な記録、そして一貫した指導方法というものを見習ってやっていきたいという気持ちが非常に強いですね。

僕は二回の優勝、そして日本一というのは一回なんですが、これをやることぐらい難しいことはないし、一年間の苦しさといったら例えようがないです。それを九年間も続けられたということは、僕らにとっては気の遠くなるようなことなんですよね。

今、僕の場合は、そういう神様の足許にようやくすがりついたという気持ちです。

でもそれだけチャンスを与えてもらっているわけなんですから、その可能性に向かってやっていきたいという気持ちは強いのです。

機動力

やはり打撃というのには波もあると思いますし、スランプもあると思うんですよね。

それを少なくするにはどうしたらよいかというと、機動力の野球だと思いますね。

昨年、ウチはチーム打率としてはセントラルで一番悪かったんです。しかし得点は一番多いわけですね。それはどこからきているかというと、走ったということではないでしょうか。次の塁にいたということが得点につながっていますからね。そういう面では非常に走るということが見直されてきたと思います。だから昨年シーズンが終わってから各監督さんが「やはり機動力を身につけなければいかん」ということをいわれています。

カープはその点では、昨年の場合は一歩先をいったと思います。これを続けていくためには、これからの人をどう育てていくかということが一番大事なことでしょうね。

そういう面ではウチには若い人たちの中にも走れる力をもった人がおりますので、そういう人たちをいかに伸ばしていくかが大きな課題だと思いますね。

決断

僕は選手の時からいつも思っていることはグランドに入って、自分ができる範囲というものを一生懸命やって、それでできなければしようがないということです。

ですから今のような立場になりましても、選手交代にしても、自分でこう決めたらこれが最高のものなんだということを考えながら今までやってきたつもりです。そして結果が悪くてもしようがないという。そういう「割り切り」というんでしょうかね。自分では常々そうやっておるつもりなんです。そうしないと毎日のゲームですから、どうしても後に残るんですね。あの時ああすればよかった、こうすればよかったとかね。こうなると非常にいやですから、ここはこいつにまかせよう。ここは交代させた方がいいと決断したら、それが一番最高のものなんだと信じて自分ではやるようにしています。

控えの選手

若い人たちを育てるということは、僕は非常に難しいことだと思いますよ。やはり失敗が随分ありますね。若い人たちというのは、どこまでがまんできるかということですよね。チームとしてはどうしても勝たなければいけないのですから。選手は自分の成績を上げればそれでいいですけれども、僕らの場合は勝たなければすぐクビになるんですからね。だからまず勝つことを前提にして考えなければいけない。だから比較してベテランの方が安全だと思えばどうしてもそちらの方を使うようになると思います。

またチームを長い目で見た場合に、この選手はチームとしては絶対必要だと思えば使っていかなければならない。僕の場合はそれがうまくやれてきたと思っていますけれども、そういう面での難しさはあると思います。

選手自身にもノルマがあります。給料が高ければ高いだけ、これだけはやりなさいということですからね。いい選手はだまっていてもどんどんやりますけれどもね。

それと控えの選手ですね。控えの選手というのはゲームに出なくては人は評価してくれないですからね。「ゲームにでてナンボですから」給料を上げてもらいたい。評価してもらいたいと思っててもゲームに出ないと評価してくれませんからね。だからそういう人たちには非常に気を使いますね。

若い奴

今の若い連中は使いにくいだろうとよく聞かれますが、僕はそんなに思いません。かえって今の若い奴はすばらしいなと思います。

自分の言いたいことをある程度主張していけるでしょう。そういう時代に今はなっていますね。特に野球界というところはそういう面があります。しかし僕らの場合は、はっきり数字がでますからね。「何を！」といっても数字がでていなければどうしようもないんです。

厳しさ

「お前はもう少し厳しくならなければいかん」とよくいわれるんですね。これは表情から受けるものだと自分では思っています。

グランドの中では、他の監督さんには絶対負けないような選手をみる厳しさというのをもっていると思いますし、その厳しさということでは絶対に負けないと思っています。

だから三時間足らずのゲームの中でどれだけ集中してやるかということが一番大事なことだと思いますね。自分でも三時間のゲームのなかでボールから目を離すということはまずないし、選手の動きとか表情とかを見落とさずに自分ではやってきておるつもりなんですよ。

だから人から「お前は柔らかい」「もう少し厳しく」とかいわれるのが自分自身でもわからないんですよ。

表情とか選手をおこらないから柔らかいというのであれば、殴れといえばいくらでも殴ることはできるし、厳しくやれといえば練習を何時間もやることはできます。しかし、そういうことが本当の厳しさではない。僕らは、お客さんに高い金を払ってもらってグランドに見に来てもらっているわけですね。だからグランドでどれだけ一生懸命やろうとするか、やらせるかが一番大事なことだと思います。僕はグランドの中に入ったらそういうことを見落とさぬように自分自身も厳しくやってきているつもりなんです。

だからそういうことをいう人たち、考えてる人たちには、僕らがいってること、やってることというのはわからないだろうと思いますね。

ただ殴ったり、表情を厳しくしているということが厳しさにはつながらないと思います。

雄大な阿蘇

熊本には過去たくさんの偉大な野球選手がでているわけですよね。川上さんを筆頭として。僕はそういう人たちを目標にしてここまできたわけです。

やはりこれからも熊本からどんどん野球界に指導者や後輩がでてほしいという気持ちでいっぱいです。

年に一、二度しか熊本に帰ることができないんですけれども、何度いってもいいというのは阿蘇です。あの阿蘇の雄大さというのが熊本のそういうのを表わしていると思うんですね。だから全国の人たちに阿蘇をみてもらって熊本のよさを知ってもらいたいですね。何度いっても阿蘇の雄大さには飽きないんですね。